

(近刊著書紹介) 春日清孝・楠秀樹・牧野修也編著
『<社会のセキュリティ>は何を守るのかー消失する
社会/個人』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 武蔵野大学教養教育リサーチセンター 公開日: 2017-06-16 キーワード: 作成者: 北條, 英勝 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/556

(近刊著書紹介)

『<社会のセキュリティ>は何を守るのか

— 消失する社会/個人』

(春日清孝・楠秀樹・牧野修也編著、学文社、2011年3月刊)

北條 英勝

この本は、一般教養として社会学を学ぶ大学生向けに企図された社会学の教科書である。しかしながら、内容的にはこれまでの社会学の教科書とは一線を画していると言えるだろう。これまでの社会学の標準的な教科書では、所謂「連字符社会学（カール・マンハイムの命名による）」的に社会学の研究領域別の章構成をとっているものが多かったのではないだろうか。これに対して本書の場合は、現代社会の変動の中で危惧される社会的諸テーマを取りあげ、それを社会学の認識・分析道具で掘り下げていくというスタイルを採用している。

具体的には、編著者を含む7名で、各テーマを分担執筆している（紹介者は第2章を担当）。目次構成と執筆者は以下の通りである。

- 序 論 社会のセキュリティは何を守るか？（楠秀樹）
- 第1章 生命のセキュリティ—進化論，優生学，エンハンスメント（楠秀樹）
- 第2章 幸福の指標化と政治—世論に基づく政治から幸福感覚の政治へ（北條英勝）
- 第3章 ケータイ社会と断片化する個人—通信メディアの変遷と社会意識の変容（三浦直子）
- 第4章 「ツール化」する地域社会／教育—地域社会と地域の教育力の意味変容（牧野修也）
- 第5章 不安な社会のコミュニティ—設計され、たちあげられる空間のために（大倉健宏）
- 第6章 社会をとらえる手がかりとしての犯罪と貧困（渡辺芳）
- 第7章 親密圏と関係性の再編—家族・教育・ジェンダーというセキュリティ（春日清孝）
結びにかえて（楠秀樹・春日清孝）

本書は、一見すると独立した7つの章からなっているが、その基底にはある共通の問題意識が共有されている。それは、タイトルに示されている、「<社会のセキュリティ>は何を守るのか」というものである。すなわち、現代の社会生活において、人々共通の安全を守る社会的な動きが進行することによって、逆説的にも、個々の安全が脅かされているのではないか、あるいは、特定の人々の安全と利益だけが保持され、その他の人々が排除されているのではないのか、という問題意識だ。

こうした問題意識に基づいて、各章では、社会の再生産を支える「生殖」をめぐる動き、

社会を数量化する「世論調査」の政治的な機能、社会の反映でもある「メディア」をめぐる動き、社会の地域的基盤にある「コミュニティ」や「都市計画」、社会の病理ともいえるべき「貧困と犯罪」、そして社会の最も基底にある関係としての「家族」や「ジェンダー」をめぐる変容について取りあげている。

そこで明らかになっていくことは、現代の社会変動のなかで、自己の安全を守ろうとするあまり、他者・集団との関係や結合をいつのまにか喪失していき、生活態度の合理化と個化とが進展していく時、「社会」は単なる「個人」の寄せ集めに過ぎなくなる、ということである。それは「社会」の解体、「社会」の消失であると同時に、人々の個性を類似化し、均質化するという意味で「個人」の消失でもあるというのが、本書が読者に対して発信しようとするメッセージなのである。

考えてみれば、「社会」とは単なる個々人の単純加算ではなく、家族、地域、学校、職場、消費といった場面での、一人ひとりが取り結ぶ無数の複雑な関係の総体と、その関係を作り出す人々の行為とによって構築されている。しかも、その「社会」のなかに産み落とされ、位置づけられ、社会化されることによって、一人ひとりが社会形成・変革の主体たる「個人」として形成されているのだ。本書は、現代社会で進行する数々の変化が、私たちが自明のこととして見逃している「社会」と「個人」とをともに脅かしてきていることに、読者に気づいてもらおうとする試みでもあるだろう。

どの章の分析でも、現代社会が抱えている諸課題を考えていくのに必要な社会学の概念・キーワード——例えば、アイデンティティ、コミュニティ、ジェンダー、権力などといった社会学の伝統的な概念だけではなく、リスク社会（ベック）、個人化（バウマン）、象徴暴力（ブルデュー）などの比較的新しいものまで——が盛り込まれているので、個々のテーマをさらに深く考えるための専門的な文献に歩を進める際、そして、それらの概念をどのように使えばいいのかを知る上でも役立つだろう。また、各章末には、テーマに関する演習用の課題も複数用意されている。これに取り組みことで、各章の個別的なトピックについて、読者が自分の身の回りのことと関連づけて考えたり、関連するデータを集めたりすることなどを通じて、各章それぞれの著者の分析意図を深く理解することにも役立つのではないだろうか。

このような本書のコンセプトが全体的にどの程度成功（あるいは失敗）しているのかどうかは、読者諸氏の判断に委ねたい。ただ著者の一人として、本書の意図を述べておくとすると、次の言葉が相応しいだろう。すなわち、この本は、これからの社会を自分自身の生活を通じて築いていく若い大学生、とくに専門として社会学を学んでいない大学生にこそ、教養として一読してもらいたい一冊である、と。